

# 「居心地のよさ」から問い直す保育環境

— 自己の存在と発揮という視点から —

## Reconsideration of the Environment of Education and Care from the Perspective of a Pleasant Place : To be Alive and Demonstrate my Personality

加藤瑛里子

村上 博文

KATO Eriko

MURAKAMI Hirofumi

(一番町保育園)

(常葉大学)

### はじめに

保育園や幼稚園、そして認定こども園（以下、園と略す）は、子どもたちにとり第2の家庭として、本当に居心地のよい場所になっているだろうか。保育園にて、子どもたちは1日のうち約8時間を園で過ごしている。また幼稚園では、一時預かり保育が行われるようになり、午前中だけでなく午後も園で過ごす子どももいる。それは認定こども園においても、同様の状況である。園における生活時間が長くなってきているからこそ、子どもにとって園は家庭にいるかのように、居心地がよく、安心して過ごせる、そして自己を発揮できる場所にならなくてはならない。

しかし実際には、園と家庭では様々な違いがある。まず園は、子どもにとって集団で生活する場所である。家庭では、きょうだいがいたとしても、たいてい2-3人であり、子どもが10人以上で一緒に生活することはない。子どもにとって友だちと一緒に過ごす時間は楽しいことであるが、何か悲しかったり辛かったりしたことがあった場合には1人になりたいときもある。そのようなとき、子どもは自分の気持ちを整理する1人だけの時間や空間が必要になる。しかし集団生活の場である園では、それを保障することは子どもにとって容易ではない。

また園には日課がある。登園すると、子どもたちは日課に従い毎日決まりきった生活をする。1日の流れが決まっていることにより、子どもは見通しをもち安心して生活を送ることができる。しかし日課は、保育者によって決められたものにすぎない。日課は大切であるが、子どもがそれにただ従うだけになってしまう恐れもある。そうになると、子どもは自分の生活を自らつくりあげていく主人公になるどころか、日課の従属者になってしまう危険性もある。

さらに園舎や園庭にも、家庭とは異なる点が多々みられる。最近では、赤、青、黄など色彩がカラフルな園舎や保育室をみかける。園庭に目を向ければ、大型遊具についても同様の傾向がある。カラフルな色は、一見目立つことから装飾や遊具に対して子どもの興味を惹く。しかし改めて考えてみると、そ

のようなカラフルな色彩の家を街で見かけることはあまりない。色彩は物的環境の一例であるが、その点からも園は子どもが居心地よく生活する場所になっているかを再考する必要がある。

これまで集団、日課、色彩などを例に、園の生活や環境について改めて振り返ってみた。保育環境について、高山静子は人の手が加えられた人工的な空間ではなく、自然により近い空間こそ大人にとっても子どもにとっても居心地のよい空間であると述べている。幼い子どもたちは、大人よりもずっと自然の美しさに気づく力をもっている。それゆえに、強い刺激は不要であると高山は指摘する。しかし高山の言葉に反するように、今日の園では赤や青などの原色が装飾に多用されている。また朝の会等で流れる音楽も、音量が大きすぎているであろうか。大人に比べて、子どもは感覚刺激の影響を受けやすい。色彩、音響など、園は子どもにとって過剰な刺激を浴びる場となり、居心地のよさどころかストレスを感じてしまう場所になってはいないか心配である。

また居心地のよさについて、森山裕理と込山敦司は公園を例に述べている。森山によれば、人間は自由に行動し、他者の存在を意識しながらも、ときにはかかわりをもつことのない関係に居心地のよさを感じる。公園は、人間にとって遊ぶだけでなく風景を眺めたり、1人でぼんやり過ごしたりする場所でもある。公園でぼんやり過ごしたいとき、人間は同じ公園内に存在する他者とほどよい距離をとり、1人になれる場をもとうとする。そして1人になれる居場所があることに、人間は居心地のよさを感じると森山らは述べる。これは公園に限らず、保育の場においても同じことがいえるだろう。

しかし居心地のよさという視点から、保育環境については十分に語られてきていない。「環境を通しての保育」が1998年に改訂された教育要領や保育指針において叫ばれて以来、空間構成や音環境、人的配置の条件などについて、保育関係者はもちろん、建築学の分野でも研究がなされるようになっていく。その一方で、居心地のよさに注目した研究は、概念自体が曖昧であるゆえに難しいせいも、研究対象になってきていない。居心地のよさというのは、子ども一人ひとりによって感じ方が異なることも考えられ、それを科学的に計測することも難しい。また居心地のよさは、園において当たり前の環境であり、それをあえて検討する余地すらないのかもしれない。

そこで本研究では、子どもたちが毎日、生活をしている園について「居心地のよさ」という視点から再考する。その際に、子どもにとって自己が「存在」する、自己を「発揮」という点に注目する。まずは現象学における居心地に関する議論（榎沢良彦やO. F. ボルノウラ）に学びながら、居心地のよさとは何かについて考える。それをふまえて、同じく現象学の立場から保育について言及している鯨岡峻が園内研修に携わっている京都の岩屋こども園アカンパニにおいて、保育者によって書かれたエピソード記述を手がかりに、居心地のよさを人的環境としての保育者のありようと重ねながら探る。さらに園の物的環境に目を向け、園舎や園庭などから居心地のよさについて考察する。以上をふまえて、居心地のよさという視点から、子どもが生きる場所である園の環境を考えるうえでの課題を指摘する。

## 1. 園における自己の「存在」と居心地のよさ

### 1.1 子どもと保育者が存在する保育空間

園は、子どもにとって生活している場所であると同時に、一瞬々々を一生懸命に生きている場所でもある。また保育者からすれば、園は子どもに対して教育・保育という営みを行なっている場であり、保育者として生きている場所である。園において、子どもと保育者はお互いに自らの存在を存在たらしめ

る重要な役割をもつ。

榎沢によると、「保育空間」とは保育者の様々な意図や配慮が生かされながらも、保育者と子どもによる共同の営みが展開している場所である。保育者の意図や配慮は、最初に決められたらそれで終わりではなく、子どもとのかかわりを通じて変化していく。保育空間では、保育者もひとりの存在であり、他者としての子どもが存在しなければ、自らも保育者として存在することはできない。また子どもと保育者は互いに存在し、認め合い、求め合ったときに、保育空間において「子ども－保育者」の関係は成立する。このときに初めて、保育者は子どもにとって「保育者」なる役割を担った存在となる。すなわち保育者とは子どもがいてこそ保育者でいられ、逆に子どもは保育者がいてこそ子どもでいられると榎沢は述べる。

保育空間に対する榎沢の捉え方は、保育室が単純に物理的な環境ではないことを物語っている。たとえば保育室に子どもと保育者がいたとしても、それだけではそこが保育空間にはならない。両者における関係のありようによって、保育室が子どもにとって、また保育者にとって生きた空間になるかどうかが決まる。

さらに保育空間を捉える視座として、榎沢は「他者との関係」「身体」「共同性」の3つを挙げている。「他者との関係」とは、人間が自分以外の他者を意識し、他者と共に生きている存在であることを意味する。また「身体」とは、空間内に存在する物体としてではなく、志向性を有し世界を生みだしている主体としての身体である。そして「共同性」とは、自己とは異なる存在として、他者がときには空間を共有して生きる相手に、また自己と区別されずとともに生きている相手になることである。要するに保育空間とは、子どもがからだ全体で他者とかかわりながら、共に生きる場所である。

園とは、子どもの気持ちや思い、願いだけでなく、保育者の気持ちや思い、願いが詰まっている場所である。しかし子どもの気持ち等が強すぎれば、保育者は子どもに伝えようとそれに従うだけになる。それは、子ども中心の空間になってしまう。その場合、保育者は子どもの気持ちに伝えることが難しくなり、その結果として子どもは保育者に対して不信感をもつようになる。反対に、保育者の気持ちが強すぎれば、そこは保育者中心の空間になってしまう。そのために、子どもは園での生活に窮屈さを感じ、居心地の悪さを感じるようになってしまう恐れがある。その結果、子どもは園において自分自身を出すことが難しくなってしまう。

それゆえに、子どもと保育者の気持ちや思い、願いのバランスがほどよくとれている空間こそが両者にとって居心地のよい場所となるにちがいない。保育者が保育者であるためには、保育者であろうとする保育者の存在を認め、保育者という存在に対して期待してくれる子どもがいなければならない。逆に子どもが子どもとして存在するには、子どもが子どもであろうとすることを認めてくれる保育者がいなくてはならない。保育者と子どもは、保育空間において互いに切っても切れない関係にある。保育空間では、子どもも保育者も保育という場を作り出す主体、言い換えるならば主人公である。そのような関係にあるときこそ、園は子どもにとっても保育者にとっても居心地のよい場所になるのだろう。

## 1.2 園における居心地のよさ－自己の存在と発揮－

しかし、子どもにとって、園が今を生きている空間として本当に居心地のよい場所になるのはたやすいことではないだろう。例えば、それを象徴するのが登園しぶりである。園に行きたくないと泣き叫ぶ子どもにとって、園はなじみのない不安な場所である。それゆえに、登園をしぶる子どもにとって、登

園は勇気を振りしぼらなくてはならない行為である。また登園できたからといって、園が子どもにとって簡単に居心地のよい場所になるわけではない。そうなるには、いくつかの段階があるだろう。

まず、子どもが園という場所に居ること自体、すなわち存在するだけで居心地のよいときである。それは、O. F. ボルノウが述べる、人間がある空間に存在し、そこで生きる、すなわち「住まう (wohnen)」状況である。ボルノウによれば、「住まう」というのは、人がある特定の位置に、そこにふさわしいものとして適合し、そこでくつろいでいることである。また外部の世界から身を引くことのできる、そこは「家屋」のように安息と平安を与えるという点でやすらいでいる状況でもある。そのような空間を、ボルノウは「内部空間」と呼んでいる。それに対して、不安や緊張を強いられる空間を、ボルノウは「外部空間」と名付けている。例えば人は、はじめて行く場所や馴染みのない場所では不安を感じたり緊張したりする。そのとき、その場所はボルノウによれば自分自身が生きる内部空間とはならず、外部空間となる。

その視点から、登園場面をもう一度思い浮かべてみよう。子どもにとって、園ははじめ不安や緊張を感じさせる場所である。入園まもない4月であれば、なおさら子どもはそうのように感じるにちがいない。しかし、毎日、通うなかで、子どもは園のなかに自分にとって興味・関心のある場所を見つけるなどして居場所を得ていく。園の中に自分が安心したりワクワクできたりする場所ができることによって、その空間は子どもにとって外部空間から内部空間へと変容していく。そうなったときに、子どもは園に居心地のよさを感じるようになっていく。

しかし、子どもが園に居心地のよさを感じるのは、自分自身の居場所を見つけるだけではないだろう。園という場所において、子どもが自分のやりたいことが思う存分にできることも大切である。それを、ボルノウは「行動空間」と呼んでいる。園が子どもにとって自らが存在する場所だけでなく、そこで自らのやりたいことができる、言い換えるならば自己を発揮できる場所になる。その際に、園が子どもにとって自らの行為を他者から認められ、そのことに喜びや充実感を感じる場所になることも大切である。

### 1.3 園における居心地の変容

しかし現実には、園は子どもにとっていつも居心地のよい場所であり続けるわけではない。それは、園が子どもにとって家から通う場所であり、一時的に生活する場所にすぎないからである。今日では園における生活時間が増えているとはいえ、園は家庭に変わるものではない。あくまで生活の柱になるのは、子どもにとって家庭である。

その意味で、園は榎沢がいう「家屋に準じた住まう場所」にすぎない。子どもにとって自分の家は、降園時刻になれば「つねにそこに帰って行くべき場所」である。それに対して園は「そこから去るべき場所」である。子どもにとって園は、一時的に住まう場所・滞留する場所である。それゆえに、子どもが生きる空間は、登園と降園を契機に毎日切り替わることになる。その役割をしているのが、園において毎日行われている朝と帰りの会である。

しかし、新年度を迎えた4月、入園したばかりの子どもが登園をしぶるときがあるように、家と園の切り替えをすることは子どもにとって簡単なことではない。その場合、園は子どもにとって行動空間になるどころか存在空間にさえなっていない。また園での生活に慣れてきたとてしも、子どもにとって今いる空間が突如、居心地の悪い場所になってしまうこともある。例えば保育室で友だちと遊んでいた子どもが、突然何かをきっかけに親の顔を思い出し、家に帰りたくなるときがある。なかには、遊びをや

めて、保育室を飛び出してしまう子どももいる。このようなとき、保育者が何とか子どもの気持ちを切り換えようと声をかけても、子どもは玄関に座り込み親の迎えを待つと言って聞く耳をもたないときもある。保育室で友だちと楽しく遊んでいるときまでは、子どもにとって保育室は存在空間であると同時に行動空間であった。しかし、玄関に座り込み親の迎えを待つ子どもにおいて、自らの心はすでに園にはなく、自分の家にある。このとき、その子どもにとって園はたとえそこに居たとしても、存在空間ではなくなっている。それは、園が子どもにとって居心地のよい場所ではなくなっていることを意味する。このように、子どもにとって園の居心地のよさはきわめて流動的であり瞬間的に変容する。それはまさしく、園という空間が生きている証拠である。

したがって、子どもにとって毎日の登園は、園という場所を自らにとっての存在空間、さらには行動空間へと変えていく試みと理解することができる。それは、ボルノウが述べる「存在空間化」と同時に「行動空間化」の営みを、子どもが毎日園にて行っていることになる。それは、子どもだけでなく保育者においても同様である。だからこそ、子どもにとって毎日の登園というのは、勇気が必要となる行為なのである。毎日、笑顔で「先生、おはようございます」と登園してくる子どもの姿を見ていると、そのようなドラマが起きていることを思わせない。しかし、登園しぶりの子どもに目を向けると、その大変さを察することができる。

## 2. エピソード記述に現れる子どもの姿から探る居心地のよさ

### 2.1 岩屋こども園アカンパニ（京都府）の保育

これまで登園を例に述べてきたように、園において子どもが生きるということは決して簡単なことではない。園が子どもにとって真に自らが存在できる空間、そして自己を発揮できる行動空間になるには、毎日における園生活の積み重ねが大切になる。その際に子どもとかかわる保育者の存在はより重要になってくるのではないだろうか。以下では、京都市にある岩屋こども園アカンパニの保育者によって書かれたエピソードを手がかりに、具体的に居心地のよさについて考えていきたい。

その前に、岩屋こども園アカンパニについて簡単に紹介しておこう。この園では「子どもの心が育つ」ことを大切に、保育者の役割は子どもを手伝うことにありと位置づける。その背景には、保育者が教えたりしつけたりしてもたいした効果はなく、子どもが自ら学ぼうとしたり変わろうとしたりしなければ大切なことは身につかないという、この園の保育観がある。また日常の保育についても、保育者の予定通りに終わるよりも、保育者の予想を超えて展開するほうが魅力的であると、この園では考える。それゆえに、デイリープログラムは緩やかに設定され、それは園での暮らしを豊かにし、楽しく日々を過ごすために用意された仕掛け＝装置のようなものにすぎないととらえている。その背景には、カリキュラムの存在によって保育という営みはその通りに進めることが目的になり、子どもが忘れ去られてしまうことに対する危惧がある。

そうした保育に対する考えから、この園では「保育セッション」と「不文の指導案」の2つを大切にしている。「保育セッション」とは、どのような遊びや活動であろうと、そこで交わされる子どもと保育者のコミュニケーションが保育者の予想を超えて展開する保育を意味する。また「不文の指導案」とは、子どもの理解と願いが保育者の胸の奥にしまわれ、いつでも取り出すことができる個別の指導案である。子ども1人ひとりの個別かつ具体的な経験の積み重ねによって、指導案は書き換えられたり上

書きされたりする。不文の指導案を参照しながら、保育者は子どもの心が育つのを手伝っていくと、この園では考える。

したがって園での生活は、子どもと保育者にとって保育セッションの連続になる。楽しいこと、ときには悲しいことがあっても、それは両者にとってかけがえのない出来事である。この園では主体的に遊んでいる子どもの傍らにおいて、保育者は子どもたちと気持ちを通わせることを大切にする。言い換えるならば、「したいから、する」1日を子どもたちとともに生きよう、そしてそれを子どもたちと楽しく過ごそう、それが岩屋こども園アカンパニが目指す保育である。

## 2.2 エピソード「にじいろのさかな」が物語る居心地のよさ

このような保育理念のもと、岩屋こども園アカンパニでは、毎日、子どもと保育者によって紡ぎ出される様々な物語が展開している。それを、この園では、保育者がエピソードというかたちで文章化している。保育者によって書かれたエピソードの中から、子どもにとって居心地のよさとは何かを考えるエピソードとして「にじいろのさかな」を紹介する(図1)。

このエピソードは、こうせい君(4歳5ヶ月)の「絵を描きたくない気持ち」に目を向けたものである。絵を描くことは、子どもによって好き嫌いがある。苦手な子どもにとって絵を描くことは苦痛でし

### 背景

9月1日の朝の活動の時間、6人の子どもたちが絵本『にじいろのさかな うみのおくのぼうけん』をテーマに、絵を描いた。今週に入って描きたいと言う子どもから取り組んできた画題だったが、3回目の今日になっても、こうせいくん(4歳5ヶ月)は気が進まないようだ。画題に魅力を感じられないというよりも、描くことに何か、ためらいがあるように思えた。

### エピソード

朝の集まりのときに「こうちゃん、今日が最後やし今日はやろうな」と話しかけたが、「いやや、やりたくない。いややねん」と2日目とおなじ答えが返ってきた。仕方なしに私は、描きたいと言う子どもたちに「スモック着て、電車のおうちに集まってな」と伝えると、みんなはロッカーにスモックを取りに行く。こうせいくんもしぶしぶロッカーに行くが、どこか乗り気ではなかった。〔中略〕そこで「こうちゃんとたいようくんの絵で、どっちが上手とかないけど、こうちゃんの絵は上手やと思うよ」と私が言うと、それを聞いて、にんまりと笑ったこうせいくんがいた。その笑顔は、「ありがとう」と言っているようだった。

### 考察

描き始めるまでは、こうせいくんは「かきたくない、かけない」という思いを抱いていたはずだったのに、こんなにも楽しんで描いてくれたことにとっても驚いた。絵本を見て楽しんでもらえたらと思って誘ったが、パレットで混色する間に、「かきたい」という気持ちに変わったその瞬間、こうせいくんは何かおもしろいことに出会えたのではないかと感じた。〔中略〕保育はどんなことが起こるかわからないが、子どもたちのいろんな姿があるからこそおもしろいのだと改めて知ることができたと思う。後日、こうせい君に「お絵かき、好きになった？」と聞くと、「えっ! あんましたくないな」と答えていた。子どもたちの気持ちは奥が深いなと感じた。

### 図1 エピソード「にじいろのさかな」

岩屋保育園(『室田一樹:保育の場に子どもが自分を開くとき—保育者が綴る14編のエピソード記述—』pp.95-100より)

がなく、それはまさしく居心地の悪い時間になる。絵を描きたくないと言うこうせい君に対して、保育者は「せめて絵本だけ見るっていうのはどう？『にじいろのさかな』の続きやし、おもしろいと思うで。スモックは着なくてもいいし、おいでよ。」と声をかける。すると、こうせい君は絵本を見るだけならいいやという気持ちでみんなのところにやってくる。このとき、こうせい君は嫌な気分のまま、絵本の読み聞かせに参加しているわけではない。絵を描かなくていいと保育者に承諾を得ているため、読み聞かせが終わった後に絵を描かなければいけないというプレッシャーを、こうせい君は感じることはない。だからこそ、こうせい君は安心してその場にいることができた。

絵本の読み聞かせが終わり、友だちは絵を描き始める。しかし、こうせい君は気が進まず友だちの様子を見ているだけである。そこで保育者は「さかなとか描かなくてもいいし、パレットでたくさんの色をつくって遊んでみる？」と、こうせい君に話しかける。それは、こうせい君の「絵を描きたくない」という言葉がうまく絵を描けないもどかしさからきていると保育者が思ったからである。こうせい君にとって、居心地の悪い場であるにちがいないが、「色づくり」という保育者の言葉で気持ちが少し軽くなる。また、こうせい君が自分から嬉しそうにスモックを着た姿を見て、保育者はこうせい君のなかに絵を描くことに対する嫌な気持ちが弱まり、前向きに描こうとする姿勢が生まれつつあることも感じとっている。こうせい君において、絵に対する気持ちの変化が大きくみられる場面である。

また好きな色を混ぜていく中で、絵本のさかなと同じ色が偶然できたことに、こうせい君は気づく。それに対して、保育者は「せっかくやし、あたま描いてみる？よく見ながらしたら描けるんちゃう？」と声をかける。保育者の声かけによって、こうせい君は背中を押されるように絵を描き始める。そして偶然、さかなの色ができたことで、こうせい君の中には自分にもさかなが描けるかもしれないという気持ちが生まれる。その結果、こうせい君は力を抜き、気楽に絵を描き始める。

このエピソードを改めて振り返ると、こうせい君に対して、保育者が無理やり絵を描かせようとする場面がない。それどころか、保育者はこうせい君の「描きたくない」という気持ちを大切に、丁寧に言葉を選んで話しかけている。今ここにいる自分の気持ちをわかっていてくれる、また大切にしてくれる保育者がそばにいてくれることで、こうせい君のなかにある不安な気持ちがやわらぐ。保育者が気持ちを受けとめ、一緒にやろうと声をかけることは、こうせい君が絵を描くきっかけを生み出している。こうせい君は保育者がそばにいてくれたからこそ、絵を描こうという気持ちになったにちがいない。しかし「絵を描きたくない」から「描きたい」へと、こうせい君のなかで気持ちが変わったことは、保育者の声かけはあったにしろ、あくまでも、こうせい君自身のなかで生まれたものである。

このエピソードには、こうせい君にとって絵を描くという日常の一場面が、居心地の悪い時間から少しづつよい時間へと変わっていく場面が描かれている。「無理に描かなくてもよいんだよ」という保育者の心の声が、こうせい君に自分もここに居てもよいんだという気持ちにさせている。その後、保育者とのかわりから、絵を描きたいという気持ちになったり、描けるのではないかと思ったりするようになっていく。それはこうせい君にとってただ居てもよい場所から、自分が振る舞える場所へと変容しつつあることを意味している。そして色を作ることができたり、満足のいく絵が描けたりするようになったとき、その場所はこうせい君にとって絵を描くという行為において自己を発揮できる場所になっている。それは、ボルノウが述べた存在空間から行動空間への移行である。

絵を描くという一場面を記述したにすぎないエピソードであるが、ここには子どもにとって園が居心地のよい場所となるには、自分のことを見ていてくれ、気持ちを受けとめてくれる保育者が傍らにいる

ことの重要性が語られている。また子どもとかかわりながら、子どもの中に「したいから、する」という気持ちが自ら生まれてくることを大切に、子どもの「やりたい」が実現されていく、それを支える保育者がいることによって、園が子どもにとって居心地のよい場所になっていくことも物語っている。要するに、人的環境としての保育者、保育という場をともに作りあげている保育者は子どもが園において居心地よく過ごすうえで重要な役割を担っている。

### 3. 物的環境という視点からみた居心地のよさ

#### 3.1 園舎・保育室における居心地のよさ

しかし、子どもが園において居心地のよさを感じるには、身近な存在である保育者だけでなく保育という営みを支えている舞台、すなわち園舎や園庭といった物的環境も重要である。「はじめに」において少しふれたが、現在ではカラフルな色彩からなる園舎も少なくない。しかし園舎の色彩として、個人差はあるかもしれないが、どんな色が子どもにとって居心地のよさを感じさせるのであろうか。そのようなことを考えて、園舎や保育室の壁面等の色彩を考えることも大切である。色彩は1つの例にすぎないが、居心地のよい場所になるように、物的環境1つひとつについて考え直さなくてはならない。

実際に「居心地のよさ」にこだわって園舎をつくった園のひとつとして、千葉県富津市にある和光保育園（通称「わこう村」）がある。この園では、園舎を建て変える際に、生活の場所として「不必要な緊張がない環境」であることを基本に据えた。園が学校をイメージさせることなく、家庭の延長として「生活の場・昼間のもう一つの家」となるように、和光保育園は園舎だけでなく園全体の環境づくりに取り組んでいる。それを象徴するように、園舎は昔懐かしい古民家風になっている（写真1）。一見するとかなり古そうな建物に見えるが、園舎を建て替えたのは2002年3月である。園舎は、木造で漆喰の白い壁と深みのあるこげ茶色の外壁と柱からなる。園舎の色を白と茶色で統一することにより、園内はすっきりとした印象になっている。光を反射する白色は室内を日の光で明るくし、茶色は気分を落ち着かせてくれる。また木は、ぬくもりややさしさを感じさせてくれる。和光保育園の園舎は、言葉で説明することは難しいが、子どもにも大人にもホッと居心地のよさが感じられる場所になっている。

また和光保育園では、園庭側の戸をすべて開け放している（写真2）。園舎の建具を開け放つことで、自然の光、音、風などが室内に入り込んでくる。それにより、室内にいながらにして、子どもたちはまるで自然の中にいるような、自然と一体化した感覚を味わう。人間は、人工物に囲まれた環境では不安や息苦しさをを感じるが、自然とともにいることで安心しリラックスする。また縁側は、室外でも室内でもない「中間領域」として位置づけられている。縁側で子どもたちは遊んだりご飯を食べたり、夏には昼寝をしたりする。そこに座ると、子どもたちは園庭と室内の両方を見渡すことができる。縁側もまた、自然を園舎のなかに取り込む、自然と共存することにこだわる、和光保育園にとって重要な場所になっている。

さらに和光保育園には、カラフルな遊具や季節を演出する壁面装飾などひとつもない。余分な装飾をしないことも、和光保育園のこだわりである。その理由は、健康なときにはあまり気づかないが、疲れたり気分が落ち込んでいたりしているとき、にぎやかな装飾は逆に子どもにストレスを感じさせると園では考えるからである。それ以外にも注目すべき場所として、保育室の奥にある畳の空間（「西の間」）がある。そこは床から90センチ高く、隣の保育室に自由に行き来できるようにもなっている。また園





写真1 園舎（和光保育園）



写真2 園舎側の建具（和光保育園）



写真3 照明（仁慈保幼園）

舎のいたる所には、日本文化を感じさせる畳や障子などがある。

このように、和光保育園の園舎は、子どもが園で緊張することのないようにという配慮から様々な工夫がなされている。保育という営みが行われる舞台、また子どもたちが毎日の生活を送る場所である園舎が、環境として居心地のよさを感じられるかどうかは重要である。人的環境としての保育者の存在も大切であるが、物的環境としての園舎や保育室も子どもたちにとって居心地のよさに影響をあたえる重要な要因となる。それを物語るように、和光保育園を訪れる見学者の多くは「ずっとここにいたい」、そんな感想を述べる。

また和光保育園と同様に、鳥取県米子市にある仁慈保幼園もまた、園が子どもにとって家のように落ち着き、居心地のよい空間、すなわち「昼間の家」になるように様々な工夫がなされている。この園は、世界で注目されているプロジェクト型保育に学びながらも、自らの保育を追求し、異年齢クラスにおける「万華鏡」の実践などを生み出したことで有名である。

居心地のよさという観点から、この園で注目したいのが保育室の光環境である。晴れているときの日の明るさや曇っているときの暗さなど、子どもが自然の光を通じることができるように、窓の配置や大きさを工夫している。自然の光が保育室に入ってくことで、子どもたちは目で明るさを、肌で温かさを体感できる。それによって子どもは、天候や時間、季節などを感じ取っていく。また照明も、蛍光灯のように人工的な白い光ではなく、電球に近い暖色系の色である。電球色は柔らかく温かみがあり、子どもの気持ちを穏やかにし、落ち着くことにつながると、この園では考えているからである。

また仁慈保幼園には、和光保育園と同様に壁面装飾がない。「昼間の家」を目指すことから、家ではないことを園でするのは「家庭的」な環境という点から反すると考えるからである。その一方で、各保育室には炊飯器が置かれている。ご飯が炊けると、部屋中にそのにおいが漂ってくる。お昼前にな

ると、仁慈保幼園の保育室ではご飯の炊けたにおいを、子どもたちは感じる。それが、お腹をすかせている子どもの食欲をさらにそそることになる。それ以外にも、仁慈保幼園では、園が子どもたちにとって「昼間の家」として居心地よく生活できるように様々な工夫がなされている。

和光保育園と仁慈保幼園、2つの園における環境構成には、居心地のよさという点で共通している。両園では、子どもが1日を過ごす場所として、家庭をモデルにしながらより緊張をあたえることがないように細かな配慮がなされている。裏を返せば、各園では園は家庭とは異なる特殊な場所であることを自覚して子どもにとって居心地のよい場所になるように工夫が求められる。

### 3.2 園庭における居心地のよさ

園舎について注目してきたが、園庭にも居心地のよさという点から、目を向けてみることにしよう。園庭といえば、ブランコや砂場などで子どもが元気よく遊んでいる姿が目につく。一生懸命にからだを動かして遊ぶからこそ、逆に子どもには心身を休めたり、のんびりしたりする場所も必要になる。思う存分からだを動かす居心地のよさもあるが、ゆったりできる居心地のよさも園庭には求められる。

例えば、先ほど紹介した和光保育園には、一生懸命にからだを動かして遊んで疲れたとき「ボーッ」としたり、ごろごろしたりできる場所が園庭にある。それは、オープンデッキや外トイレなどである。オープンデッキは園庭に面しており、1階と2階をつなぐ縁側として造られている。デッキから子どもは園庭全体を見渡すことができる(写真4)。また外トイレには滑り台や展望台がついており、デッキ同様に子どもは園庭を眺められる(写真5)。ただ園庭を眺めているだけであるが、子どもたちにとって爽快な気分になれる場所がオープンデッキや外トイレである。

またオープンデッキにつながる階段の下(写真6)や遊具・建物の裏、園庭の隅など、人目から遮られる場所もまた、子どもにとって居心地のよさを感じる場所である。自分の気持ちを整理したいとき、何となく1人になりたいとき、気分が落ち込んでいるとき、疲れているときなど、そうした場所は子どもにとって癒しの場所になる。友だちの笑い声や話し声、楽しそうに遊んでいる様子は、そうした心もちの子どもにとってストレスを感じる。そのようなとき、自分だけの世界に入れる場所が子どもには必要である。それが、和光保育園の園庭には保障されている。

同様に、神奈川県横浜市にある川和保育園でも、居心地のよさを感じるという点で環境づくりに工夫がなされている。川和保育園では「自分で考え 自分で学べ 子どもたち」という保育理念を掲げ、子どもたちの力を信じ、見守る保育をしている。川和保育園の園庭は、足を踏み入れると、そこはまるでジャングルのようなものである。そこで子どもたちは、崖や壁、木を登るなどダイナミックな遊びを展開している。

川和保育園では、例えば園庭にある崖や木はすべて、自分の力で登らなくてはならない。子どもたちは自分で自らの身体能力を把握し、自分の力でできるようになるまで何度も挑戦を重ねる。失敗を繰り返しながら、チャレンジをし続けることによって、子どもは少しずついろいろなことができるようになっていく。子どもにとって園庭は、最初は何もできない場所であるが、次第に様々なことができる場所、すなわち自己の力を発揮できる場所になる。それは、園庭が子どもにとって居心地のよい場所になることを意味する。

しかしダイナミックな遊びが展開される毎日だからこそ、川和保育園でも遊びきった後にほっとした



写真4 オープンデッキ（和光保育園）



写真5 外トイレ（和光保育園）



写真6 階段の下（和光保育園）

り休息したりできる場所が園庭にある。例えばイチョウの大木の上には、園のシンボルとしてツリーハウスがある。このツリーハウスは二層になっている。一層目はハンモックと絵本コーナー、二層目は園庭を見渡せる場所がある。夏には、ハンモックに横たわり、誰にも邪魔されることなく、くつろぎながら絵本を読んでいる子どもの姿がみられる。

和光保育園と川和保育園では、園庭の雰囲気はまったく異なる。両者に共通しているのは、子どもが自己を発揮して、思う存分遊ぶだけでなく、からだを休息したり心を落ち着かせたり、「ボーッ」としたりすることができる、そんな場所が園庭に存在する点である。

## おわりに

本稿では、「居心地のよさ」という視点から園の環境について考察してきた。第1節では、現象学の影響を受けた榎沢らの議論を拠り所に、園に存在するだけでなく自己を発揮できることが居心地のよさにつながると述べた。第2節では、京都市にある岩屋こども園アカンパニの保育者が書いたエピソードをもとに、園が子どもにとって居心地のよい場所となるうえで保育者との関係が重要であることを指摘した。そして第3節では、保育者（人的環境）から園舎や園庭（物的環境）に視点を移し、和光保育園、仁慈保幼園、川和保育園の環境を例に、色彩や照明などにおいて過剰な刺激がなく緊張をあたえることのない環境、またホッとできる場所が居心地のよさにつながることを述べた。

今回、「居心地のよさ」という視点から保育環境を考えることによって、保育において当たり前とされているが環境の大切さを改めて認識することになった。居心地のよさについては、子ども一人ひとり感じ方が異なるかもしれない。しかし、居心地のよさにおいて、どの子どもにも共通しているのは、その場所に安心していられ、自己を発揮できるということである。そうした雰囲気は、きっと他の子ども、

そして保育者も、そして園全体にも広がっていくはずである。

今後の課題は、引き続き子どもにとって居心地のよい環境とは何について探求していくことである。居心地のよさという非常に曖昧なものであるからこそ、今後の研究も困難が予想される。しかし2章で述べたように、エピソードに登場する子どもの姿から、この問いについて探求していきたい。

## 文献

- 1) 榎沢良彦：『生きられる保育空間』、学文社、2004
- 2) 高山静子：「九州 子どもにとっても大人にとっても居心地の良い空間 -- 若竹保育園 改修：団建築事務所（特集 本当によい建築とは何か－8人の専門家による優良建築選）」、『建築ジャーナル』1011、pp.55-57、2002
- 3) 森山裕理、込山敦司：「公園のランドスケープデザインが居場所と行動に与える影響」、『日本建築学会東北支部研究報告集. 計画系』71、pp.221-224、2008
- 4) 栗本浩二：「保育所における壁面装飾絵画の可能性と重要性についての一考察」、『研究紀要』6、pp.95-107、2010
- 5) 室田一樹：『保育の場に子どもが自分を開くとき－保育者が綴る14編のエピソード記述－』、ミネルヴァ書房、2013
- 6) Bollnow, O. F.：『人間と空間』、大塚恵一、池川健司、中村浩平訳、せりか書房、1978
- 7) わこう村（和光保育園）『保育課程－和光の保育理念・保育方針ガイドブック－』  
<http://www.wakoh-mura.com/> を参照
- 8) 仁慈保幼園『入園のしおり』
- 9) 寺田信太郎・宮原洋一：『ふってもはれても－川和保育園・園庭での日々と113の「つぶやき」』、新評論、2014

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、写真提供など快く協力をしてくださった和光保育園、仁慈保幼園、川和保育園に、心よりお礼申し上げます。